

# 接続語句の機能—文脈の選択

松尾文子

## 1. はじめに

接続語句に関して従来さまざまな角度から研究がなされてきた。また、接続語句の呼び名にも何種類かあり、具体的にそれらにどんな語句を含めるのかも人により異なる。接続語句をBallはlinking word、Blakemore、Blass、Rouchotaはdiscourse connective、Fraser、Jucker、Schiffrinはdiscourse marker、Halliday & Hasanはconjunction<sup>1</sup>、Schourupはdiscourse particle、Quirk et al.はconjunct、さらにconjunctの一部をdiscourse initiatorと呼んでいる。他にconjunctive adverb、pragmatic markerなどの呼び名がある。

呼び名やどのような語句を含めるかの違いはさておき、接続語句の共通して見られる特徴は以下の通りである。

- ① 発話の真理条件を左右しない。
- ② 発話の命題（意味）内容に何も加えない。
- ③ その有無で前後の談話の潜在的な関係は変わらない。
- ④ 典型的には文頭に現れるが、語句によっては文中や文尾にも現れる。

本論ではまず従来の主な研究を概観し、Sperber & Wilsonの知見を取り入れて接続語句の談話解釈における機能、特に文脈との関わりを論ずる。

## 2. 先行研究

### 2.1 Halliday & Hasan

彼らが唱えるのは文と文との意味的・語用論的なcoherence(一貫性)の理論である。この理論によると、テキストは文内、あるいは文と文の間の

cohesiveなしくみを用いることによって構成される。接続語句はテキストの cohesion(結束性)を形成するしくみである。彼らは conjunctive relation (接続関係)を additive、adversative、causal、temporalに分類する。additiveには and、or、furthermore などが、adversative には yet、but、though、however などが、causalには so、then、for、because などが、temporalには then、next、finally などが含まれる。

この考え方はテキストにおける語彙的・統語的な連続性、すなわち言語形式を抛り所としている。きちんとしたテキストであるためには語彙的・統語的な coherenceが満たされていなければならないのだから、テキストを解釈するには発話と発話の間の coherenceを見つけなければならないことになる。しかしこの理論では言語形式を抛り所に談話の cohesionを形成するので、後述する先行発話が言語形式として具体化されていない場合の接続語句の役割を説明できない。

## 2.2 Schourup

これは談話やテキストの組織化に関する理論である。談話の構成要素として次の3つがあげられている。

- ① 話し手のPrivate World: 話し手が考えてはいるが、まだ明らかにしていない事柄。
- ② 話し手と聞き手のShared World: 会話を通して示される事柄。
- ③ Other World: 会話の他の参加者のprivate world。

この3つの worldの中で接続語句がどのように機能するかが考察されている。たとえば、wellは現話者が private worldの内容を聞き手に説明するというのが基本的な用法である。you knowは会話の参加者の共有世界での今現在の出来事(状態)に関して、private worldと other worldの間に伝達上重大な違いがないことを示す。これらの語句の他に now、I meanなど会話で多用される表現が論じられている。

---

## 2.3 Schiffrin

これも談話やテキストの組織化に関する理論である。談話は次の5つのplane(レベル)を結合してできるものであるとする。

- ① exchange structure: 質問と応答、要求と承諾のような主に隣接することばのやりとりの構造。質問や応答といったそれぞれの要素をturnと呼び、複数の参加者が関わるdialogueでのみ現れる。
- ② action structure: 質問 - 応答 - 応答の承認のようなspeech activity。speech activityには一定の型があり、あるactivityにどのようなactivityが続くか予測可能である。それぞれのactivityをactと呼び、dialogueのみならず monologueでも現れる。①と②は非言語的な要素である。
- ③ ideational structure: 談話内で見られる idea(命題)間の関係を反映し、意味論的な要素である。
- ④ participation framework: 話し手と聞き手。<sup>2</sup>話し手と聞き手の発話(idea、turn、act)に対する関わり方も含む。①や②と同様に広い意味で語用論的な要素である。
- ⑤ information state: 話し手と/や聞き手の持っている知識やメタ知識(それぞれが相手と共有していると考えている(と仮定される)知識)。

discourse markerを用いることによって、話し手は多様な planeを構成したり統合したりできる。このようなプロセスを経てcoherentな談話ができあがるのである。

この理論では、たとえば andは複数のideaを並列し(③)、話し手が前と同一の actを続けることを示す(②)。butも andと同様に複数のideaを並列するが(③)、後続する actが先行する actとは矛盾するものであることを示す(②)。soは2つのideaの関係が原因と結果であることを示し(③)、話し手は聞き手に何らかの情報を推論の根拠として使わせたい

と思っており (⑤)、soに後続する部分は話し手が聞き手にして欲しい act である (②)。会話で多用される y'know と I mean は participation framework と information state に関わるものであるとされる。

## 2.4 Relevance Theory

Sperber & Wilsonによって提唱されたRelevance Theoryはコミュニケーションに対する認知的アプローチ、人間の伝達・発話解釈の理論である。話し手と聞き手の相互認知環境(mutual cognitive environment)<sup>3</sup>を改変できれば、伝達は成功したと言える。この理論では伝達をcost-effectの観点から見る。最小限のcost(労力)で最大限のeffect(効果)をあげることができれば、理想的な伝達ができるのである。

この理論の核となる関連性の原則(principle of relevance)には2つの原則がある。

- ① 認知原則: 人間の認知は関連性が最大になるようにできている。
- ② 伝達原則: 全ての意図明示的伝達(ostensive communication)行為はその行為自体の最適な(optimal)関連性の見込みを伝達する。

最適な関連性の見込みを得るには2つの条件がある。

- ① 意図明示的刺激(ostensive stimuli)(4.1 参照)は、受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある。
- ② 意図明示的刺激は、伝達者の能力と優先事項に合致する最も関連性のあるものである。

簡単に言うと、受け手にとってその発話を処理することが価値のあることだと伝達者は明らかにしなければならないのである。

Blakemore(1987)流に言うと、接続語句はsemantic constraints on relevanceを課す機能を担う。接続語句が伝えるのは、発話の意図された

---

解釈に到達する(=最適な関連性を達成する)ために受け手がなすべき推論のタイプに関する記号化された情報である。これによって受け手が発話解釈を探る可能性のある範囲を狭める、すなわち発話の解釈を制限することができる。例をあげる。

(1) Anne is coming. *So* [*After all/However*] Nigel's here.

—Blakemore (1992: 46)

soに後続するのは先行発話から推論した結果、after allに後続するのは先行発話で示される事柄の理由である。howeverの場合は、たとえば受け手がAnneと Nigelが犬猿の仲であるという想定を持っていたらAnneが来るならば Nigelはここにいないと考えるであろうが、実際はその反対であることが示される。このように、Anneが来ることと Nigelがここにいることの関係の解釈が接続語句によって指示されるのである。

### 3. 発話と発話をつなぐ機能

#### 3.1 2つのタイプ

接続語句には発話と発話をつなぐ機能がある。これには命題態度を修飾するものと発話行為をつなぐものがある。<sup>4</sup>

(2) a. (You say he's deaf, but) he came, so he heard me screaming.

b. Here we are in Paris, so what would you like to do on our first evening here? —中野 (1997: 171)

(2a)は命題態度を修飾する例で、彼がやって来たという事実から彼は私が叫び声をあげるのを聞いたという結論を導き出している。(2b)は発話行為をつなぐ例で、パリに着いたという事実に基づいて第一夜は何をしたいかを質問するという発話行為を行っている。すなわち、話し手は聞き手に質

問するという自分の意図を示しているのである。

### 3.2 命題態度を修飾するもの

接続語句によって直前の発話と当該の発話をつなぐ。次例は検死官が専門家に骨の鑑定結果を聞く場面である。

(3) “There’s no question it was inflicted by a serrated blade.”

“Then she wasn’t sliced but hacked?” I asked, puzzled.

—P.Cornwell, *All That Remains*

被害者がギザギザの刃でやられたという事実から、話し手は被害者がたたき切られたと推論し、then以下でそれが示されている。

次例の話し手は、ロシア人はドイツ語を話さないという想定をもっている。

(4) “You speak German?”

“Yes.”

“Ah, so you’re not Russian, then?”

“No.”

—J.Archer, *Kane and Abel*

話し手は相手がドイツ語を話すことを根拠にロシア人ではないと結論づけている。<sup>5</sup> このsoはSperber & Wilsonのいうところの、話し手が前提として持っている旧情報と新たに得た新情報を統合して導き出される含意である「文脈含意」(contextual implication)を導入する機能を持つ。<sup>6</sup>

接続語句が直前の発話だけでなく、先行する一連の発話と当該の発話をつなぐ場合がある。次例は英米の新聞ではあなたがCIAだと報じられていると記者に言われた米海軍兵学校の教官のRyanとDaily Mirror紙の記者のやりとりである。

---

(5) “I read this morning. It was as much a surprise to me as it was to anyone else.” Ryan smiled. “Somebody made a mistake. I’m not good-looking enough to be a spy.”

“ So you deny that report?” asked *the Daily Mirror*.

—T.Clancy, *Patriot Games*

スパイになれるほど格好よくないなどの一連の先行発話から、話し手は Ryan が CIA だという記事を否定していると結論づけている。

次例の he は詐欺師で、以前 Tracy と共謀して大金を手に入れたことがある。お金を山分けする直前に彼女の方がお金を持ち逃げしてしまい、それ以降二人は会っていない。彼女が催したカクテル・パーティに若くして莫大な遺産を相続した Howarth 男爵夫人が招待されていた。夫人が同伴して来たのは Tracy の詐欺師仲間の彼だった。彼は夫人の遺産をねらって、結婚歴のあることを隠して彼女と付き合っていたのだ。彼が Tracy に対して皮肉を言ったので、彼の元妻のことを持ち出した場面である。

(6) Baroness Howarth was astonished. “You’ve been married twice?”

“Once,” he said easily. “Rose and I got annulment. We were very young.” He started to move away. Tracy asked,

“ *But weren’t there twins?*”

—S.Sheldon, *If Tomorrow Comes*

婚約を解消したし二人ともとても若かったということから導き出せる子供はいないだろうという結論とは反対のこと、すなわち双子がいた（形は疑問文だが意味的には双子がいたことの確認）と述べている。

### 3.3 発話行為をつなぐもの

接続語句には先行の発話と続く発話行為をつなぐ機能がある。次例は学

校の寮に新しく入った Ben が友人の Elizabeth に寮での生活について尋ねる場面である。

(7) In the dorm room Ben noticed a utility closet in a corner.

“Is there maid service here?” Ben asked.

“No.”

“Then how is this place going to get cleaned, with no supplies?”

“We’ll buy some,” Elizabeth answered.

—A.Corman, *Prized Possessions*

掃除道具も備えつけられていないしメイドもないということを根拠に、どうやって掃除するのかを質問する発話行為を行っている。聞き手に質問するのが話し手の発話の意図である。

次例は特別捜査官の Werner が FBI の人質救出チームに指示を出す場面である。

(8) “Okay, listen up,” Werner said. “They want an advance team in Hagerstown. The chopper’ll be here in half an hour.”

“There’s a severe thunderstorm warning,” one objected lightly.

“So take your airsick pills,” Werner advised.

—T.Clancy, *op.cit.*

話し手は激しい雷雨の予報が出ていると聞いて、その中をヘリコプターで飛ぶと揺れるだろうと推論し、酔いどめの薬を飲みと命令する発話行為を行っている。命令をするのがこの発話の意図である。



---

## 4. 非言語的文脈と発話をつなぐ機能

### 4.1 非言語的文脈

ここまでの例では、接続語句でつながれる先行の発話は言語という具体的な形で表された。しかし、先行発話が言語で表されない非言語的文脈である場合もある。次の例を見てみよう。

(9) Context: Peter puts some salmon on Mary's plate.

Mary: *But* I'm allergic to fish. —Rouchota (1998: 12)

(10) Context: Peter hands Mary the £20 he owes her.

Mary: *So* you've been paid. —*ibid.*

いずれも接続語句の前に具体的な発話はなく、(9)ではピーターがメアリの皿に鮭をのせる、(10)ではピーターが借りていた20ポンドをメアリに手渡すといった状況、すなわち非言語的文脈が発話の代わりに現れている。(9)では、*but*が導く命題が先行の文脈から推論できる予想を否定するものであることがこの語によって示されている。*but*によって導入される命題は、聞き手(ピーター)が先行文脈から文脈含意として引き出すと話し手が仮定する命題(ピーターがメアリに鮭をすすめる→メアリが鮭を食べる)の否定を含意(メアリは魚アレルギーである→メアリは鮭を食べない)している。(10)では、ピーターが借りていた20ポンドをメアリに手渡すという状況から、メアリはたとえば彼が給料をもらったと推論し、*so*によってこの文脈含意が導入されている。

このように非言語的文脈となって現れているのはRelevance Theoryというostensive stimuli(意図明示的の刺激)である。これは認知効果をあげるのに使われる刺激、すなわち情報意図を話し手と聞き手に相互に顕在化するのに使われる刺激である。情報意図(informative intention)とは聞き手に対して想定集合{I}を顕在的、もしくはより顕在的にすることである。ostensive stimuliには2つの条件があり、一つは聞き手の注意を引くこと、もう一つは聞き手の注意を伝達者の意図に集中させることであ

る。接続語句はこのような先行の ostensive stimuliと当該の発話をつなぐものだと考えられる。これらの例では ostensive stimuliは具体的な発話ではなく、ピーターの行動という形で現れている。(9)では鮭を皿にのせることによって聞き手（この場合はメアリ）の注意を引き、鮭を食べるようにすすめていることが顕在化されている。(10)では20ポンドを差し出すことで聞き手（メアリ）の注意を引き、借金を返そうとしていることが顕在化されている。

ところで、非言語的文脈となって現れるのが ostensive stimuliではない場合もある。

(11)Context: Peter comes in through the front door. Mary who was sitting in the living room, goes out in the hall.

Mary: *But* you had to work late shift today.

—Rouchota (1998: 18)

(12)Context: Peter is browsing through a PC magazine. Mary comes in the room.

Mary: So you're thinking of buying a computer. —*ibid.*

(11)ではメアリはピーターの姿を見て今日は遅番じゃなかったのと発話している。butによって、彼女は彼が遅番だという事実とは反対の想定を持っていたことがわかる。(12)ではメアリはピーターがパソコンの雑誌を読んでいるのを見て、パソコンを買おうと思っているんだと発話している。soによって彼女が彼の行動を根拠にこのような結論を導き出した、すなわちso以下が文脈含意であることがわかる。これらが(9)、(10)と異なるのは、ピーターは聞き手（メアリ）の注意を引こうとして玄関から入って来たわけではないし、パソコンの雑誌を読んでいたわけでもないということである。

以上のことからわかるのは、接続語句は単に発話と発話をつなぐだけではなく、発話を解釈するための文脈を作るのに積極的な役割を果たしてい

---

るということである。従来の文脈に関する考え方では、まず文脈が決定され、それから発話の解釈の過程が始まる。文脈は決定項で、関連性が変項である。一方Relevance Theoryでは、文脈は前もって決められるのではなく、発話が解釈される過程で関連性を最適にする文脈が選ばれたり構成されたりすると考える。認知的に言うと、人間は情報を処理するときに処理される想定が関連性があると期待し、その期待を正当化するような文脈を選ぼうとする。関連性が決定項で、文脈が変項である。

接続語句は発話解釈の過程で最適な関連性を有する文脈を選んだり構成したりするためのガイド役を果たしているのである。特に先行文脈が具体的な発話となって現れない場合には、接続語句が当該の発話の話し手がどのような想定を持っていたかにアクセスする手がかりになる。(9)ならばピーターはメアリが鮭を食べると思っていると、メアリは想定している。(11)ならばメアリはピーターが遅番勤務だから今は家にはいないはずだと想定していることがわかる。接続語句は発話の状況や文脈を構成するのに非常に大きな役割を担っているのである。次に実際の例を見よう。

#### 4.2 命題態度を修飾するもの

Tracy は無実の罪で投獄された監房から独房へ移された。その後再び元の監房に戻った。Paulitaはそこにいる女囚のボスである。

(13) Paulita grinned with surprise when she saw Tracy. “ So you came back to us, pretty pussy. You liked what we did to you, huh?”  
—S.Sheldon, *op.cit.*

Paulita は Tracyの姿を見てこのように発話している。Tracyは Paulitaの注意を引こうとして監房に現れたわけではないが、soによって話し手の Paulita がこの状況を根拠にここで示される文脈含意を引き出したことがわかる。この発話がなされる文脈に Paulitaが Tracyの姿を見たことが選ばれたことが、soによって明示されている。

#### 4.3 発話行為をつなぐもの

検死官 (I)と刑事(he)が風通しの悪いガレージで殺人の証拠となる車を調べている場面である。

(14) “You want me to start it?”

He handed me the key.

“Then please open the garage door so we don’t asphyxiate ourselves,” I added. —P.Cornwell, *Body of Evidence*

検死官が車を動かして欲しいのかと尋ねると、刑事が車のキーを差し出した。この行動（非言語的文脈）から検死官は刑事が車を動かして欲しがっていると推論し、ガレージのドアを開けてくださいと依頼する発話行為を行っている。聞き手に依頼するのが話し手の発話の意図である。この場合は刑事は検死官の注意を引こうとしてキーを差し出している。依頼の発話行為をするにあたって、話し手は相手がキーを差し出したのだから車を動かして欲しいと思っていると解釈したという文脈が選ばれたことが、thenによって明示されている。

#### 5. 談話の流れを作る機能

これは従来は談話構成上の機能、あるいは談話の組織化の機能とされてきたものである。次例は2人の登場人物が互いに自分のことを語り合っている場面である。

(15) “... Do you have brothers and sisters?”

“No,” he said. “No I don’t.”

She makes a face. “You’re lucky. Anyway, thanks for the coke. And thanks for walking me.”

—J.Guest, *Ordinary People*

---

先行文脈では家族のことが述べられているが、anywayによって談話の流れが断ち切れ、これまでとは異なる文脈（相手の行為に対して礼を言う）が作りだされる。

さらに例をあげる。盗みを働いて危うく片手を切り落とされそうになった（イスラムの古い宗教法ではこのように定められていた）WladekはHarryというイギリス人に助けられて、トルコの英国大使館に連れて行かれた。副領事のPrendergastがWladekに事情を聞こうとしている場面である。

(16) “Thanks for joining us, Harry. Do have a seat, old boy.”

Mr.Prendergast turned to Wladek. “Now my lad, let’s hear your story from the beginning, with no exaggerations, only the truth. Do you understand?” —J.Archer, *op.cit.*

Wladekは副領事の部屋に通されたが、副領事は無言で椅子をすすめた後再び書類を読み始めた。数分後にやって来たHarryにまず話しかけてから、Wladekの件に話題を移している。nowによって先行文脈から一転して本題に入るといふ文脈が作り出される。

このように、接続語句によって先行文脈からどのように次の文脈を展開させるのか、どのような方向に新たな状況や文脈が作り出されるかが明らかにされるのである。

## 6. おわりに

Relevance Theoryによると、心理学者は「刺激」(stimulus)という用語を知覚されることを予定された物理的環境の修正(modification)全てに用いており、この理論でもそれになっている。発話は刺激の特殊な例であるとする。そうであるならば、接続語句が発話と発話をつなぐ場合も、非言語的文脈と発話をつなぐ場合も、いずれも何らかの刺激と発話をつなぐ機能を接続語句が担っていることになる。

非言語的文脈と発話をつなぐ場合を考えてみると、話し手と聞き手の回りにはさまざまな刺激があるが、その中には処理するに値しないものもあれば、関連性が高く、思考、ひいては発話のきっかけになるものもある。(10)ではピーターが20ポンドを差し出すことが彼に給料が出たとメアリが考え、発話するきっかけになっている。(12)ではピーターがパソコン雑誌を読んでいることが彼がコンピュータを買おうと思案しているとメアリが考え、発話するきっかけになっている。ただし(10)とは異なり(12)の場合は、メアリが知覚する可能性のある刺激として、部屋が散らかっている、ネコがソファーで寝ている、ピーターの髪形が変わったなどが考えられるが、先行発話に相当する文脈としてメアリはピーターがパソコン雑誌を読んでいるという現象を選んだのである。

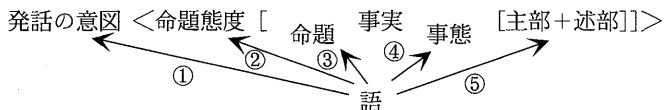
発話と発話のつながりを解釈する場合にも、接続語句はその解釈を限定し、つながりを明示するのに役立つ。(4)では「ドイツ語を話す」という発話と「ロシア人ではない」という発話のつながりを解釈しなくてはならないが、soによって話し手はロシア人はドイツ語を話さないという想定をあらかじめ持っていて、その想定をもとに相手がロシア人ではないと結論づけたことがわかる。一方談話の流れを作る機能に目を移すと、前の二つの機能は先行の言語的・非言語的文脈と当該の発話との関係を明らかにすることであったが、この機能は次の文脈の展開の方向を明らかにし、新たな文脈を作り出すことである。

以上のように、接続語句は単に文と文、発話と発話を接続するだけのものではなく、談話の解釈、さらには自らが文脈を構成するのに積極的に関与しているのである。

## 注

1. 同書では conjunction の代わりに conjunctive、conjunctive adjunct、discourse adjunct という名も用いている。
2. 話し手と聞き手の概念は、一般的に用いられているそれよりもかなり広い。詳細はSchiffrin (1987: 27)を参照されたい。

3. 一個人の認知環境とは、当人にとって顕在的である事実の集合体である。  
 4. 発話の意味構造と語の意味の関係は次のように考えられる。



発話の意図とは、命題、命題態度を伝達し、聞き手に何らかの働きかけをしようとする話し手の意図。命題とは命題態度の対象で、文が表す事態の事実性。事態とは文の表す出来事や状態で、文脈からは切り離された narrated event である。次例の斜体の語は、それぞれかっこ内に示される機能を果たす。

- a. He was at home *then*. [⑤事態の内容を表す]  
 b. I had a drink and *then* I went home. [④事態をつなぐ]  
 c. A: He might not give us the money.  
 B: *Then* what would we do? [①発話行為をつなぐ]  
 d. *If* he's Marconi, I'm Einstein. (彼がマルコーニのような大学者であるというなら、私は定めしアインシュタインだ：私がアインシュタインでないのと同様、彼はマルコーニのような大学者であるはずはない)  
 [③命題をつなぐ] (中野 1997)
5. このように推論を表す so と then は “so 平叙文 then?” の型で用いられることがある。  
 6. (1) の so の例がこれに当たる。話し手はたとえば Anne と Nigel は仲がよく、いつも一緒に行動するという想定を持っていて、そこに新たに Anne が来るといふ情報を得て Nigel がここにいることを導き出す。

## 参考文献

- Ball, J. 1986. *Dictionary of Linking Words in English Discourse*. Macmillan.  
 Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell.  
 Blakemore, D. 1988a. “‘so’ as a Constraint On Relevance.” In R.M. Kempson ed. *Mental Representations: The Inference between Language and Reality*. 183-195. Cambridge University Press.  
 Blakemore, D. 1988b. “The organization of discourse.” In F. Newmeyer ed. *The Cambridge Survey*, vol. IV. 229-250. Cambridge University Press.  
 Blakemore, D. 1989a. “Denial and contrast: A relevance-theoretic analysis of ‘but’.” *Linguistic and Philosophy*. 12:15-37.  
 Blakemore, D. 1989b. “Linguistic form and pragmatic interpretation: The explicit and implicit.” In L. Hickey ed. *The Pragmatics of style*. 28-51. Routledge.

- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell.
- Blass, R. 1990. *Relevance relations in discourse*. Cambridge University Press.
- Blass, R. 1993. "Are there logical relations in a text?" *Lingua*. 90: 91-110.
- Carston, R. 1993. "Conjunction, explanation and relevance." *Lingua*. 90:27-48.
- Fraser, B. 1990. "An Approach to Discourse Markers." *Journal of Pragmatics*. 14:383-395.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. Longman.
- Jucker, A.H. 1993. "The discourse marker *well*: A relevance theoretical account." *Journal of Pragmatics*. 19:435-452.
- 中野弘三. 1997. 「意味変化の一方向性仮説についての一考察」 *Conference Handbook* 15. 171-174. English Linguistic Society of Japan.
- Quirk, S., S.Greenbaum, G.Leech and J.Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Rouchota. 1998. "Connectives, Coherence and Relevance." In V.Rouchota and A.H.Jucker eds. *Current Issues in Relevance Theory*. 11-57. John Benjamins Publishing Company.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge University Press.
- Schourup, L. 1985. *Common Discourse Particles in English Conversation*. Garland Publishing.
- Sperber, D. and D.Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. (2nd edition) Blackwell.